

たいじょうほうしん

带状疱疹後神経痛について

健 康

通 信

常陸大宮済生会病院

外科・消化器科医長
目黒 由行先生

带状疱疹とは、子どもの時にかかった水ぼうそう（水痘）のウイルスが、水ぼうそうが治った後も、脊髄近くの神経節と呼ばれる部分に潜み、疲れやストレスなどで身体の抵抗力が低下（免疫低下）した時に再活性化することで、神経を通して皮膚に带状疱疹（水ぶくれ）ができ、痛みが生じることです。高齢者や免疫が抑制された状態の方に多く発症するとされています。

痛みには、皮疹が出現する前に起こる「前駆痛」、皮疹が出現している時に起こる「急性带状疱疹痛」、そして皮疹が治った後も続く「带状疱疹後神経痛」があります。前駆痛や急性带状疱疹痛は、主に皮膚の炎症による痛み（侵害受容性疼痛）ですが、带状疱疹後神経痛は神経が傷ついたことによる痛み（神経障害性疼痛）であり、この2つの痛みは発症のしくみも治療法も異なります。

带状疱疹が治った後、どの時点で带状疱疹後神経痛と確定するかについては、明確な規定はありませんが、3カ月程度が目安とされています。带状疱疹を患った人のうち、3カ月後で7～25%、6カ月後で5～13%の人が発症しているという報告もあります。带状疱疹後神経痛の痛みや症状には、次のような痛みが混在したり、時間の経過とともに変化したりするといった特徴があります。

<痛みや特徴>

- ・間欠的な（一定の時間で繰り返す）刺すような痛み
- ・針で刺すような痛み
- ・ヒリヒリする、チカチカする、ズキズキする痛み
- ・締め付けられるような痛み
- ・持続的な焼けるような痛み（灼熱痛）
- ・電気が走るような痛み（電撃痛）
- ・触れただけの刺激を痛みとして感じる（アロディニア）
- ・腫れたような感じ
- ・知覚低下、感覚鈍麻：触覚、痛覚、温・冷覚の低下
- ・重たい感じ

<带状疱疹から带状疱疹後神経痛に移行しやすい人>

- ・高齢者（60歳以上）
 - ・免疫力が低下している
 - ・带状疱疹の急性期の症状が重症である（皮疹がひどい、痛みが激しい）
 - ・触れただけの刺激を痛みとして感じる（アロディニア）、大きく感覚が低下している（知覚異常）などの症状がある
- *急性期から疼痛の対策を行なうことが重要**

带状疱疹後神経痛の治療には、薬物療法と補助的に神経ブロックが用いられています。薬物療法には、神経障害性疼痛治療薬が用いられます。また鎮痛補助薬として三環系抗うつ薬、抗てんかん薬が用いられることもあります。これらの領域の治療を専門としている施設はペインクリニックと呼ばれています。（県内にあるペインクリニックは日本ペインクリニック学会のホームページより確認することができます）

治療を進めるうえでは、痛みを完全に取り去ることは難しいため、いかに痛みをコントロールしてうまく付き合うか、といった考えで治療に取り組むことが大切です。

日本ペインクリニック学会ホームページ <http://www.jspc.gr.jp/>

